

早稲田大学審査学位論文  
博士（スポーツ科学）  
概要書

スポーツにおける暴力についての応用倫理学的研究：  
野球に関連して生じる暴力現象への責任概念からの検討をとおして

**Applied Ethics of the Violence in Sport:  
With Reference to the Concept of Responsibility to  
the Violent Phenomenon in Baseball**

2014 年 1 月

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科

大峰 光博  
**Omine, Mitsuharu**

研究指導教員： 友添 秀則 教授

本研究は、序論、本論、序章、1章、2章、3章、結章からなっている。

本研究の目的は、まず、野球に関連して生じる暴力の問題を個々の具体的事例に基づいて、倫理的ジレンマを生む構造的な問題を応用倫理学の視点から明らかにすることにある。応用倫理学の具体的な視点として、責任概念を設定し、個々の暴力事例にアプローチする。最終的に、その過程を通して得られた知見をもとに、野球以外のスポーツにおける個別具体の暴力事例を論じる上でも、本研究で設定した責任概念が問題状況の理解を深め、考察を進めるための有効な分析枠組みとなる可能性を提示することにある。

序章では、スポーツにおける暴力研究のための予備的考察を行った。まず、本研究で用いる暴力概念の暫定的規定を行い、身体の傷害のみならず、権力の意味内容を包含するドイツ語の“Gewalt”の概念を採用した。採用した暴力概念から、近年に、野球に関連して生じた暴力事例を抽出し、一定の肯定論と否定論が存在する、報復死球、体罰、対試合合禁止処分を具体的な研究対象として選定した。次に、本研究の方法である応用倫理学の、スポーツの倫理問題への援用可能性について述べた。本研究では、既存の道德原理を個別の倫理問題に適用し、一定の結論を導くのではなく、現実の問題を考えるのに有用な原理を考え、その応用を検討するという応用倫理学の立場を採用した。責任という原理に着目し、スポーツにおける実践的な倫理問題を論じることの可能性について示した。本研究では、瀧川による責務責任概念に、コミュニタリアニズムの代表的論者であるサンデルが指摘した連帯の責務を加えた概念を分析視点として設定した。この意味での責務責任概念を、絶対的な原理ではなく、道德的問題を議論する過程のなかに組み込まれた一部分として機能するにすぎず、問題状況の理解を深め考察を進めるための、ツールとして位置づけた。

1章では、試合場面における暴力事例である、報復的死球について論じた。序章において設定した責務責任概念を用いることによって、報復死球に対する、ピッチャーの責務責任について考察した。具体的には、メジャーリーグにおいて、対戦チームから故意死球を受けたチームにおけるピッチャーが負っている、責務責任について考察した。結果としては、公式野球規則を遵守し、意図的に対戦チームを傷つけないという、報復死球を抑止する責務責任が存在した。一方で、対戦チームからの故意死球に対して、報復死球を行うという不文律を遵守する、報復死球を促進する責務責任が存在し、ピッチャーの倫理的ジレンマを生む、対立する責務責任の構造が明らかになった。対立する諸々の責務責任において、どのような責務責任が優先されるべきかについて論じていくことが、今後、報復死球の問題に取り組む上での課題として示唆された。

2章では、練習場面における暴力事例である、体罰について論じた。責務責任概念を用いて、野球部における指導者が勝利追求に対して、いかなる論理から責務責任を負うのかを検討し、体罰問題にアプローチした。本研究では特に、勝利をより求められる環境にある、野球強豪校、さらには、野球強豪校を目指す学校の部における指導者が、いかなる論理から勝利追求に対して責務責任を負うのかを検討した。結果としては、野球という競技スポーツへの参加によって生じる勝利追求の責務責任、野球部に関わる人々の勝利追求への期待から生じる責務責任、さらには、教育の論理から生じる勝利追求の責務責任から、野球強豪校と野球強豪校を目指す学校の部における指導者は、構造的に勝利追求に対して責務責任を負っていることが明らかにされた。一方で、部活動における指導者には、部員に危害を加えたり、傷つけたりしてはならない責務責任があり、勝利追求と体罰を行使しないことを両立させることが、野球部における指導者の責務責任であると結論づけられた。野球部における体罰の抜本的な解決に際しては、体罰の非道徳性を訴え、指導者の資質向上を図るだけでなく、指導者が構造的に負っている勝利追求に対する責務責任を、体罰につながらせないための具体的な方略を模索していくことが課題として示唆された。

3章では、日常生活場面の暴力事例である、対外試合禁止処分について論じた。責務責任概念から、不祥事を起こした野球部員に対する同チームの部員による責務責任について検討した。結果としては、野球部と学校の一員であることは社会的・歴史的な役割を担うことであり、野球部員は野球部や学校という諸共同体の一員であることを通して、道徳的責任を見出す必要があると解釈された。野球部や学校という共同体の一員であることは、部員同士が同胞としてたがいに負う、忠誠と責任という連帯の責務を生じさせる点が明らかにされた。最終的に、不祥事を起こした部員に対して同チームの部員は、自身の選択による結果ではないという根拠とは無関係に、連帯や成員の責務を負うと結論づけられた。対外試合禁止処分の問題においては、コミュニタリアニズムの観点に基づく責任観とリベラリズムの観点に基づく責任観の対立構造が存在した。対外試合禁止処分という罰則を科す主体である、学生野球協会の責務責任についても検討することが、今後、対外試合禁止処分の問題に取り組む上での課題として示唆された。

結章では、1, 2, 3章で明らかになった知見から、野球以外のスポーツにおける個別具体の暴力問題を論じる上でも、本研究で設定した責任概念が有効な分析枠組みとなる可能性を示した。